（様式５）　　平成２９年度　　教職大学院派遣研修　研究報告書

| 派遣者番号 | 29K04 | 氏　名 | 大森　則子 |
|---|---|---|---|
| 研究主題<br>―副主題― | 外国語活動における人間関係づくり<br>－構成的グループエンカウンターの活用を通して－ | | |
| 派遣先 | 創価大学教職大学院 | 担当教官 | 田村　修一　　近藤　茂代 |
| 所属校 | 立川市立第三小学校 | 校長 | 井上　和芳 |

キーワード：外国語活動、構成的グループエンカウンター、人間関係、コミュニケーション

## １　研究の背景（目的）・主題設定の理由等

近年、人間関係に関する課題が現出し、いじめや不登校、学級崩壊など問題が派生している。河村(2010)は学級集団の成立の最低条件の一つを「学級内の親和的な支持的な人間関係の確立」とし、学級集団を成立させる上で人間関係が重要なことを示唆している。また平成22年、文部科学副大臣の主催によるコミュニケーション教育推進会議が設置された。同会議の審議経過報告(2011)の冒頭でも人間関係形成の能力、特にコミュニケーション能力の重要性を強調している。

このコミュニケーション能力の育成を目標においているものとして外国語教育が挙げられる。しかし、日本人はどちらかと言えば寡黙で、受け身の傾向が見られるため、安心してコミュニケーション活動が行えるよう児童同士の人間関係を築く必要がある。そこで、本研究では自己理解や他者理解を重視した構成的グループエンカウンターを活用し、外国語活動の中で人間関係の向上を図る。具体的に以下のことを行う。①外国語活動に構成的グループエンカウンターのエクササイズを位置付けた10時間のプログラムの作成、実施。②介入実験授業の前後に人間関係の構成要素「自己理解」「他者理解」「親和性」の変容を見る質問紙調査の実施。③振り返りカードによる詳細な分析。

これらの調査結果を分析し、良好な人間関係づくりに資する外国語活動の在り方を考察する。

## ２　研究の内容・研究の方法

### （１）調査対象児童

東京都内の市立小学校６年生92名。

### （２）介入実験授業および調査時期

(事前調査)2017年9月5日

(介入実験授業)2017年9月5日～10月17日

(事後調査)2017年10月17日

### （３）調査内容と手続き

人間関係に関することとコミュニケーションに関することについて意識調査をするため、「人間関係についての意識」尺度を開発した。介入実験授業の前と後に、質問紙を用いて４件法で回答を求めた。

### （４）介入実験授業（外国語活動）の授業構想

**①介入実験授業のねらい**

本授業では、人間関係の向上のために必要だと考えられる自己理解、他者理解、親和性の高まりを目指す。それとともに、外国語活動の本来の目標であるコミュニケーション能力の素地を養う。

**②介入実験授業の流れ**

介入実験授業は、Greeting、Words and Phrases、Warm-up Activity、Main Activity、Review、Greetingの流れで行うものとする。

**③ねらいを達成するための工夫**

**〇構成的グループエンカウンターの活用**

メインの活動として設定したWarm-up ActivityとMain Activityの二つのいずれか、もしくはその両方を、構成的グループエンカウンターのエクササイズを活用したものとする。

**〇振り返りカードによるシェアリングの重視**

構成的グループエンカウンターではとりわけシェアリングが重視されているため、振り返りカードを活用し、授業の中で気付いたことを「自分のこと（自己理解)」「友達のこと（他者理解)」「自分と友達の関係（親和性)」の観点から記述することとした。また、書いたことをペアもしくは班でシェアリングを行う。書く、話す、聞くことを総合的に行うことにより、シェアリングを通して構成的グループエンカウンターの効果が高まるよう活動を設定した。

## ３　研究の結果

### （１）人間関係についての意識分析

人間関係についての意識尺度26項目の因子構造を検討するために、主因子法・プロマックス回転を用いた因子分析を行い、４因子（17項目）を抽出した。さらに、尺度の信頼性（内的整合性）を検討するために、全質問項目（17項目）の Cronbach のα係数を算出したところ因子１「親和性（５項目）」は.88、因子２「コミュニケーションスキル（5 項目）」は.82、因子３「自己理解（3 項目）」は.74、因子４「他者理解（4 項目）」は.82 という値が得られた。各因子とも.70 を上回っており、本尺度には信頼性があると判断した。

### （２）介入実験授業前後における人間関係についての意識の比較

介入実験授業での構成的グループエンカウンターの活用が、人間関係についての意識に影響を及ぼすかを検討するため、対応のある $t$ 検定を行った。その結果、「親和性」と「コミュニケーションスキル」において 0.1%水準で、「自己理解」と「他者理解」においては 5%水準で有意差が認められ、いずれの項目も有意に上昇した（**図１**）。

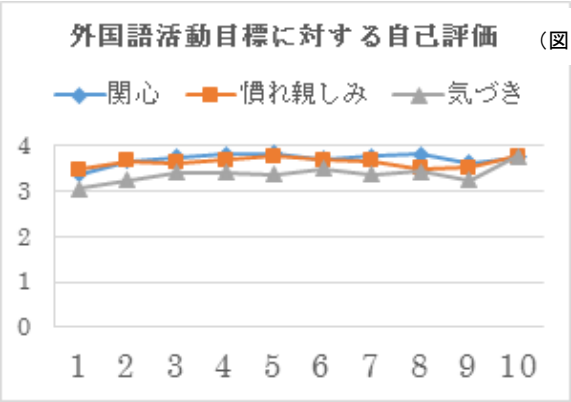
介入実験授業前後の「人間関係についての意識」のt検定の結果　（図１）

| | | N | 平均値 | 標準偏差 | t値 |
|---|---|---|---|---|---|
| 親和性（5項目） | 介入前 | 92 | 16.4 | 3.33 | 4.07*** |
| | 介入後 | 92 | 17.5 | 2.75 | |
| コミュニケーションスキル（5項目） | 介入前 | 92 | 14.9 | 3.02 | 4.90*** |
| | 介入後 | 92 | 16.4 | 3.00 | |
| 自己理解（3項目） | 介入前 | 92 | 8.2 | 1.91 | 2.58* |
| | 介入後 | 92 | 8.7 | 1.94 | |
| 他者理解（4項目） | 介入前 | 92 | 13.3 | 2.36 | 2.23* |
| | 介入後 | 92 | 13.8 | 1.98 | |

*p＜.05　***p＜.001

### （３）外国語活動目標に対する自己評価

外国語活動の目標を児童に分かる記述に直し、振り返りカードに記載した。児童は、外国語活動の目標に対し４件法「４大変よくできた」「３だいたいできた」「２少しできなかった」「１できなかった」で自己評価を毎時間行った。１クラスを抽出し、全 10 時間の自己評価の平均得点を算出した。その結果、毎時間３～４と高得点を示した（**図２**）。



（図２）

## ４　研究の考察

本研究では、異なる授業者により同一プログラムを実施した。その結果、「自己理解」「他者理解」「親和性」のいずれの因子も統計的に有意に上昇した。この結果は、本プログラムが児童の人間関係改善に一定の効果があったと解釈できる。「自己理解」「他者理解」の深まりにより一緒にいて安心でき、自由にものが言いやすく、親近感をもてたことが、自由記述からも分かった。

コミュニケーションスキル因子も介入後、有意に高く、自己評価も高得点を保っていた。小学校では表現が限られているものの、構成的グループエンカウンターを用いることで協働的に課題を解決しなければならない場面が発生し、児童は工夫をして伝えていた。これは、カナール（1983）の提示したコミュニケーション能力の一つ、方略的能力（問題が起こったときに処理する能力）が用いられていたからだと解釈した。

本研究は、１サンプル実験研究であった。また、プログラムの有効性について若干クラス差も見られたため、さらに詳細な研究が必要である。

## ５　今後の展望

本研究は構成的グループエンカウンターを活用した外国語活動のプログラムを開発し、実施することで、外国語活動そのものの目標達成とともに、人間関係の高まりも見られた。

このことから、アクティビティを意図的に設定することで、児童の学習意欲や人への信頼感につながることが示唆された。どのような人間関係の高まりを期待して、アクティビティを設定するのか十分に考えた上で意図的にプログラムを作成することが重要となる。

学校現場への活用の際は、これらの配慮を十分に行った上で、実施する必要がある。